

過去を用いて下さる主

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は罪深い人間ですから。』』と言った。・・・イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。』』
(ルカの福音書5章8節および10節b)

今、まだ新年の雰囲気の間、私たちはいい意味で過去と決別し、前をこそ向いて進んでいこうとしているのではないのでしょうか？それはそれでとても尊いことだと思います。何しろ、心理学者のエリック・エリクソンは「人は90%の過去とわずか10%の現在に生きている」と言っているくらいですから・・・。

しかしながら、逆に、過去を全否定されてしまうのも、いかなるものでしょうか？よくクリスチャンになったばかりの姉妹に対して、主にある新しい人生のすばらしさを強調したいがために、過去を全て否定すべきであるかのように言うてしまうことがあるかと思いますが。確かに、勢いパウロがそのような言い方をしていること(⇒ピリピ3:8)も見受けられます。ただ、やはり、それもあくまで「キリストを知っていることのすばらしさのゆえ」なのです。むしろ、上掲の場面を通して、主は、私たちの過去をいい意味で用いられるお方であることを覚えたいと思います。すなわち、主はシモン・ペテロの生涯を全否定することなく、かつての漁師としての歩みを活かして、魚をとる漁師から人間をとる漁師へと召されているのです。パウロの過去をも主が用いられたことは言うまでもありません。その律法(=旧約聖書)や(ユダヤ教)信仰への熱心さを、キリストを宣べ伝える伝道者として大いにお用いになったのです。・・・そして、もちろん、あなたの過去も！

どこから来て、どこへ行くのか？～歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる～

「主の使いは、荒野の泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、『サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。』と尋ねた。」
(創世記 16 章 7～8 節)

主にあつて新年おめでとうございます。今年も何卒よろしくお願ひいたします！ちなみに、今年 2018 年は、御茶の水キリストの教会がこの地に誕生して、七十年の節目を迎えます。言うなれば、教会創立七十周年ということになります。

このような節目の時は、往々にして、過去の栄光に浸ったり、あるいは、お祝いムードに浮かれる傾向があるものです。しかしながら、私たちは決してそのようなことにのみ終始することなく、むしろ、大いに過去の歩みから教訓を得、また、しっかりと将来の展望を見据えつつ、“今” いかに行動すべきかをこそ、じっくりと考えたいと思います。そこで今年のテーマ「歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる」。

上掲のみことばには、あのアブラ(ハ)ムの妻サラ(イ)の女奴隷ハガルが主人のもとを追われ、身重であったにも関わらず故郷エジプトへ至る荒野を一人寂しく彷徨っていた時に、主の使いによって呼び止められ、問い掛けられた問いが記されております。すなわち、主(の使い)はハガルに対して、その名を呼び、「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と問うているのです。

ここで主は、まず第一に「どこから来て」、即ち、なぜこうなったのか、過去を顧みてみなさいと問うています。そして、第二に「どこへ行くのか」、即ち、今後どうするつもりなのか、将来のことを熟慮しなさいと促しています。そうして、“今” どうすべきかを考えて行動しなさいとおっしゃっているのではないのでしょうか？